

# 府中のピオトープを見つめて

## 第4回 ピオトープめぐり (2)



府中事業所の北の森公園にはクヌギ林がある。雑木林というにはクヌギ以外の樹種があまりないが、木々は皆大きく生長している。ゆうに20m以上はあるだろう。夏にここで森林性のノコギリカミキリが見つかったという。虫好きの私にはちょっとうれしい話である。

里山の雑木林はかつて薪炭林として利用されていた。15~20年を経た林は伐採され、炭や薪に利用された。伐採によりできた明るい空間には、次世代を担う稚樹が芽生え、それが再び林に生長していった。そうやって、人の手により20年ほどのサイクルで、雑木林は若々しい姿に更新されてきたのである。しかし、農林業の担い手を失った今となっては、林はひたすら生長を続けるばかりだ。大きく育った森の地表には光が届かず、稚樹が芽吹くこともない。もちろん木にも寿命がある。世代をつなげない森はやがて朽ち果てる運命にある。

事業所のクヌギ林は更新された履歴がなく、その意味では危ういのである。ただ、公園に利用されてきたのが幸いして、林床に草や低木が茂っていない。地表に光が十分射し込むため、そこにはどんぐりから芽生えたクヌギの稚樹がたくさん見られる。この子供たちは次世代の森を担う宝である。彼らが育てば、事業所の各所に雑木林を復元できる。



ショウリョウバッタモドキ(幼体)



ショウリョウバッタモドキ(成体)

そこから西に向けて歩く。ビオトープ池を横に見て柵沿いに進むと、伸び放題に茂った草地に出た。見た目は別にして、生き物の住処としては悪くない。

すぐ目に付いたのが大きなショウリョウバッタのメス。のそりという感じで草むらに逃げ込んでいく。それよりだいぶ華奢な姿のオスもすぐに見つかった。ツユムシやウスイロササキリなどのキリギリスの仲間も多い。ムクドリが飛び、カナヘビも顔を見せた。

私がここで確認したかったのは、ショウリョウバッタモドキである。夏の初めに撮影された幼虫の画像を目にしたときから気になっていた。このバッタも東京ではかなり珍しい。しかも、敏捷に飛びすぐに葉の裏側に隠れる習性があるので、慎重にやらないとなかなか見つからない。ややあって目の前に現れたのは、緑の体に背中の紫色が鮮やかなメスの個体であった。そのすぐ近くからオスも見つかる。生息している数も結構多い。

小1時間ばかりの散策だったが、事業所に点在する緑地ではたくさんの生き物とふれあうことができた。課題も多少あるけれど、自然の素材が良いことだけは太鼓判を押したい。これからのビオトープ整備に期待がふくらむ。

=====

執筆者紹介：新里達也

1 級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。